



【緒言】



これまで受動喫煙による健康被害については多くの報告がなされている。なかでも成長発達の途上である小児において、将来に対する影響は計り知れない。

さて、歯科領域においても、齲蝕・歯周病・歯肉着色などとの関係が深い。しかし、幼児期における受動喫煙の口腔内の影響についての報告はみあたらない。

そこで今回、受動喫煙による幼稚園児の、齲蝕リスクおよび歯肉着色について調査した。



幼稚園児の歯肉着色

受動喫煙により、登園時には、タバコの臭いがしている

【対象および方法】

幼稚園児3～6歳児85名を対象として、歯科健診時に、齲蝕の状態について診査するとともに、上顎乳前歯部の歯肉着色の状態についても調査した。歯肉着色は、基準となるチャートを用い同一診査者が判定した。歯肉着色スコアは、class 1 からclass 4までの4段階に分類した（図1）。

そして診査後、幼稚園児に対し「お父さんかお母さん、あるいは おうちにタバコを吸う人はいますか？」と質問し、家庭内における受動喫煙の状態について調べた。そして受動喫煙と齲蝕歯数および歯肉着色の状態との関についても検討した。

図1 歯肉着色スコアー



Class 1



Class 2



Class 3



Class 4

着色の判定は、歯肉着色の見本に基づき同一診査者が行った。
歯肉着色スコアーは、1：ピンク色の健全歯肉，2：弱い発赤はあるがほぼ正常歯肉，
3：部分的に黒く着色，4：広い範囲で黒く着色 として判定した。

歯肉着色の割合



class 1



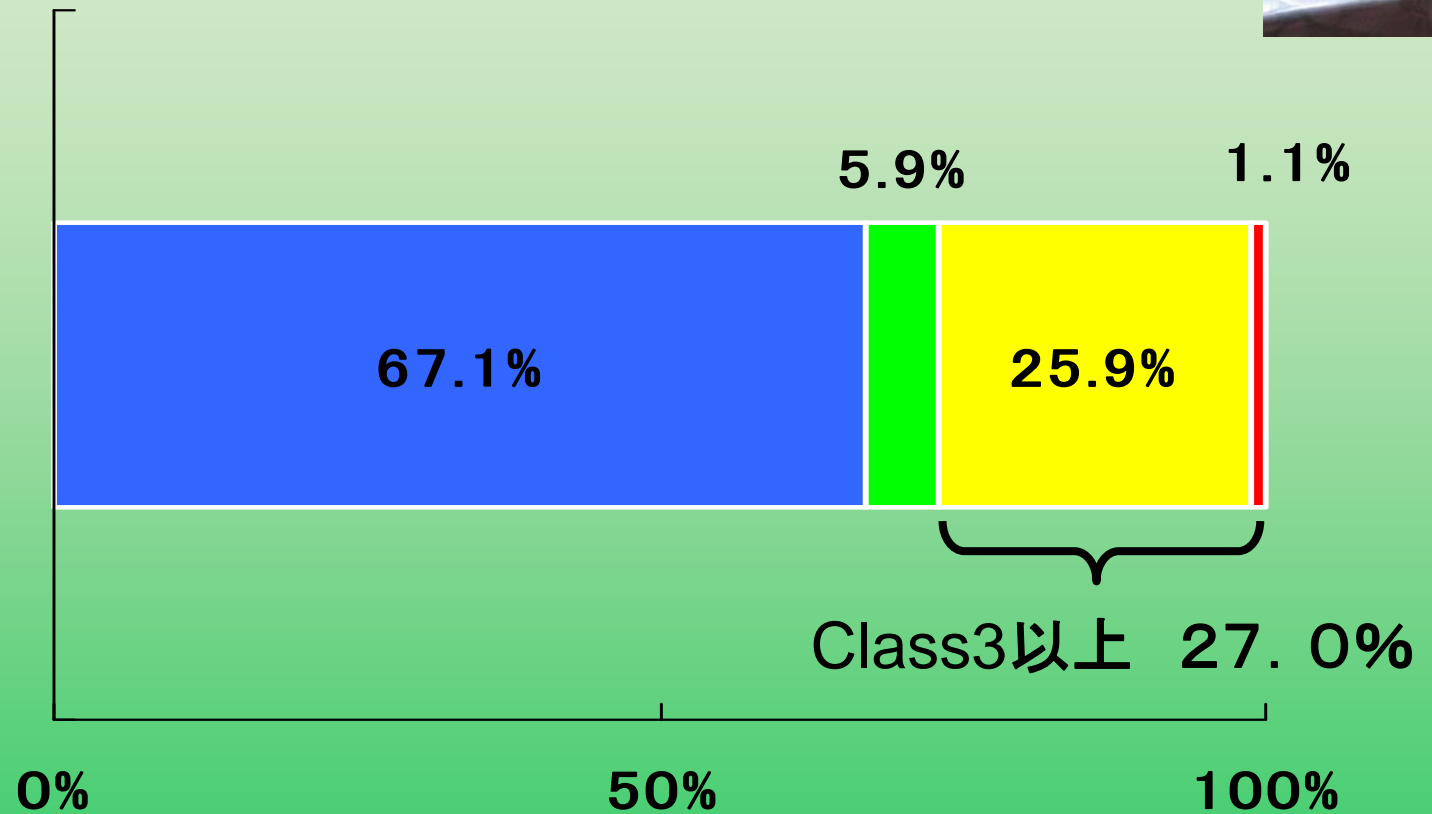
class 2



class 3



class 4



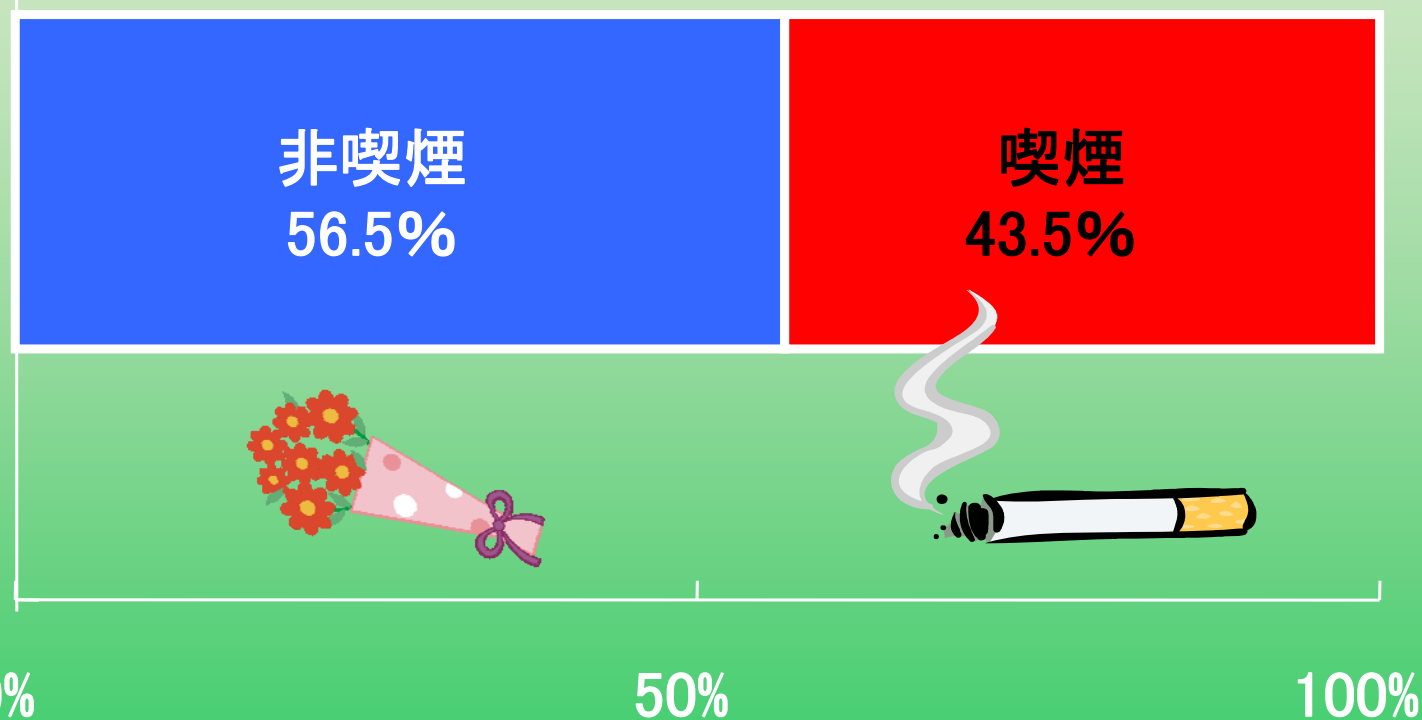
歯肉の着色は、Class1:67.1%(57名)、Class2:5.9%(5名)、Class3:25.9%(22名)、
Class4:1.1%(1名)であり、32.9%(28名)の幼稚園児に着色が認められた。



同居者の喫煙の割合

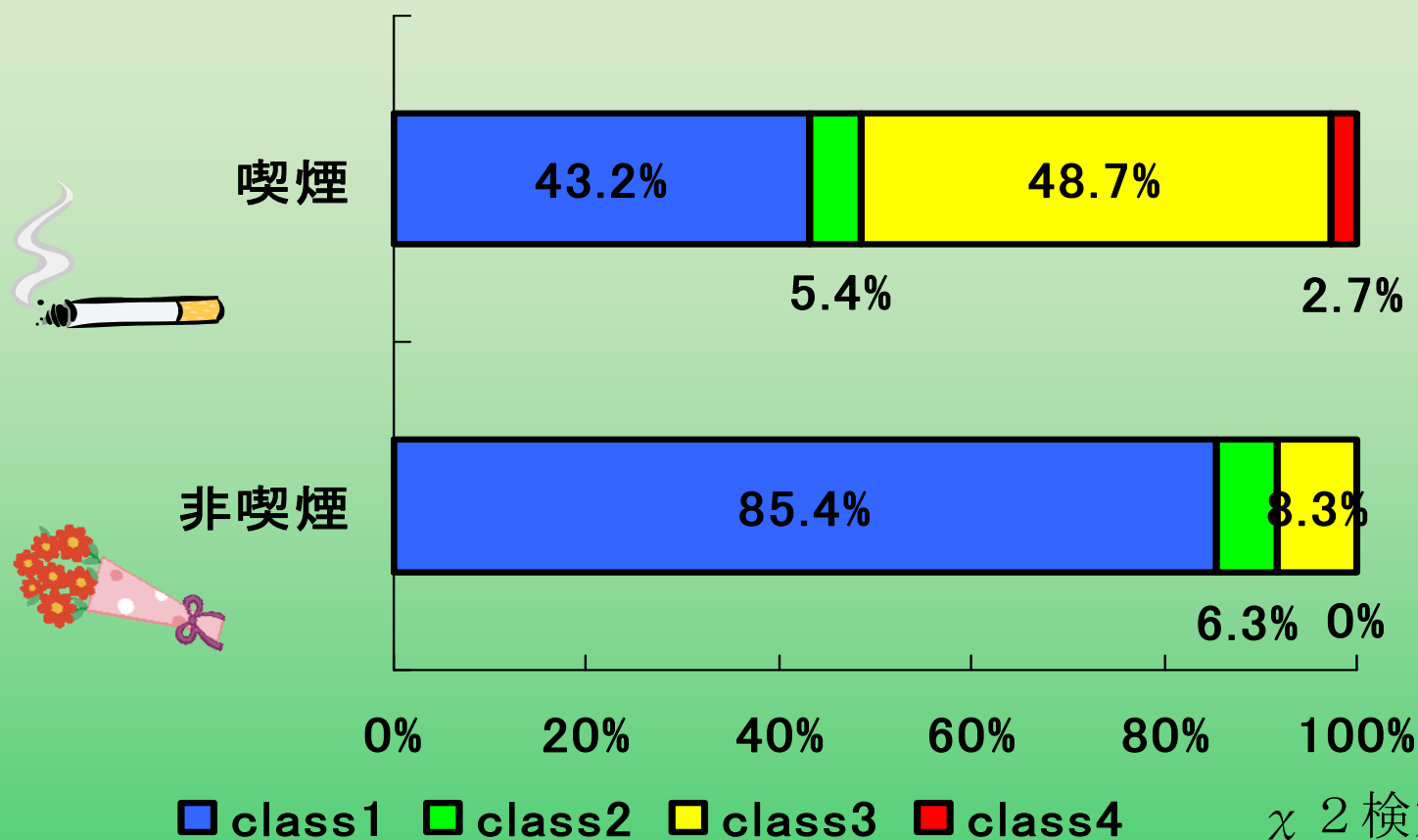
■ 非喫煙

■ 喫煙



家庭での喫煙状況は、同居者が非喫煙 56.5 % (48 名) ,
同居者のいずれかが喫煙 43.5 % (37 名) であった。

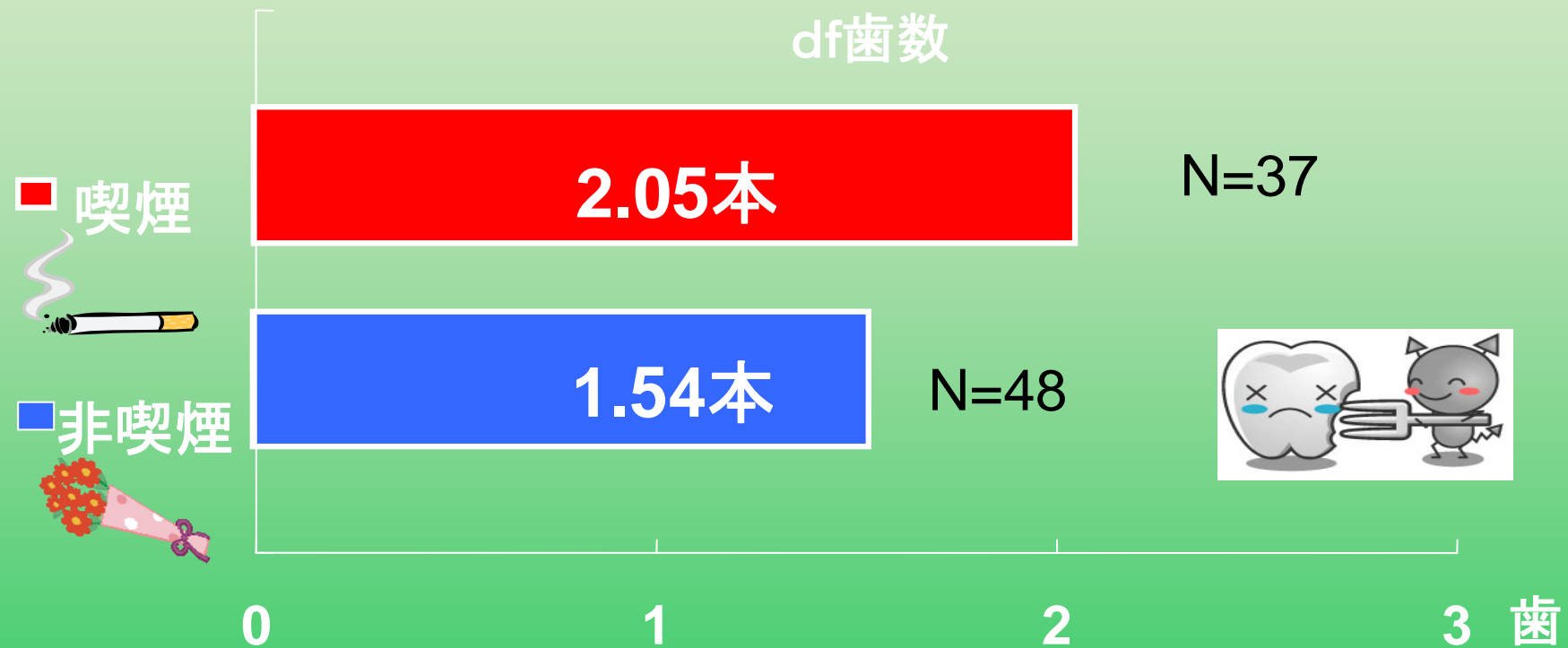
同居者の喫煙・非喫煙と歯肉の着色



同居者が喫煙している場合の着色スコアは、Class1: 43.2% (16名), Class2: 5.4% (2名), Class3: 48.6% (18名), Class4: 2.7% (1名)であった。一方、喫煙者がいない場合では、Class1: 85.4% (41名), Class2: 6.3% (3名), Class3: 8.3% (4名), Class4: 0% (0名)であり、両群間には有意の差が認められた。(p<0.001, χ^2 検定)



同居者の喫煙とう蝕の数



同居者に喫煙者がいない幼稚園児のdf歯数は1.54歯であり、喫煙者がいる場合では2.05±3.08歯であった。喫煙者の有無により、df歯数に約0.5歯の差があったものの有意の差は認めなかった。

【考察及び結論】

同居者に喫煙者がいない場合，約15%の幼稚園児にし
か歯肉の着色がないのに対し，喫煙者がいると実に56%も
着色が認められた。また，df歯数との関係は明らかではな
かったが，受動喫煙により齲蝕リスクが高くなる可能性は考
えられた。この点については，今後の検討課題としたい。

以上の結果から，幼児期にも受動喫煙による影響が口腔
に現われていると考えられた。またこの年齢における着色
原因の約半数が，受動喫煙の影響である可能性が示唆さ
れた。

【文献】

1) Hanioka, T, et.al.:Pediatrics,116;186-190,2005.

